

SCCIの使い方



目次

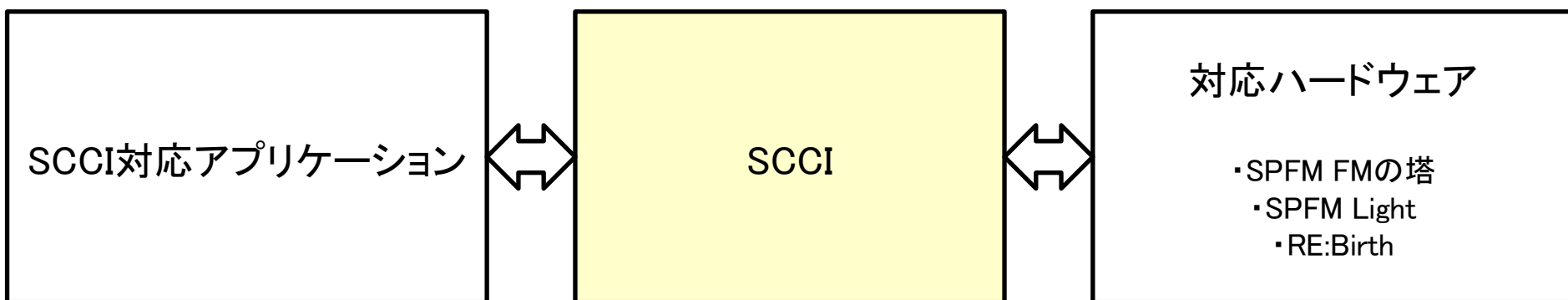
- SCCIとは
- SCCIの動作イメージ
- SCCIの使い方
- scciconfig.exeの使い方
- SCCIの操作

SCCIとは

Sound Chip Common Interfaceの略です。
アプリケーションから対応ハードウェア(音源インターフェース)を意識せずに音源チップにアクセスするAPIを提供することを目的として開発中のDLLです。

SCCIの動作イメージ

SCCIはアプリケーションと対応ハードウェアの間に共通のAPIを提供するためアプリケーションはAPIを利用することでハードウェアを意識せずに、音源チップにアクセスできます。



また、アプリケーションがSCCIを利用している場合、今後登場するハードウェアの対応については、SCCIが対応することで、アプリケーションの変更無しに利用が可能となります。

SCCIの使い方

SCCIを利用するには、対応アプリケーション及び、対応ハードウェアが必要になります。
scciconfig.exeを使い、PCに接続しているハードウェアの情報を設定し作成されるscci.ini
及び、scci.dllを対応アプリケーションと同じフォルダに格納する必要があります。

現在、下記のハードウェアに対応しています。

- ・SPFM FMの塔

YM2608/YM2151/YM2610(B)を搭載した音源モジュール

- ・SPFM Light

RE:Birth音源モジュール用のミニ音源マザーボード

- ・RE:Birth

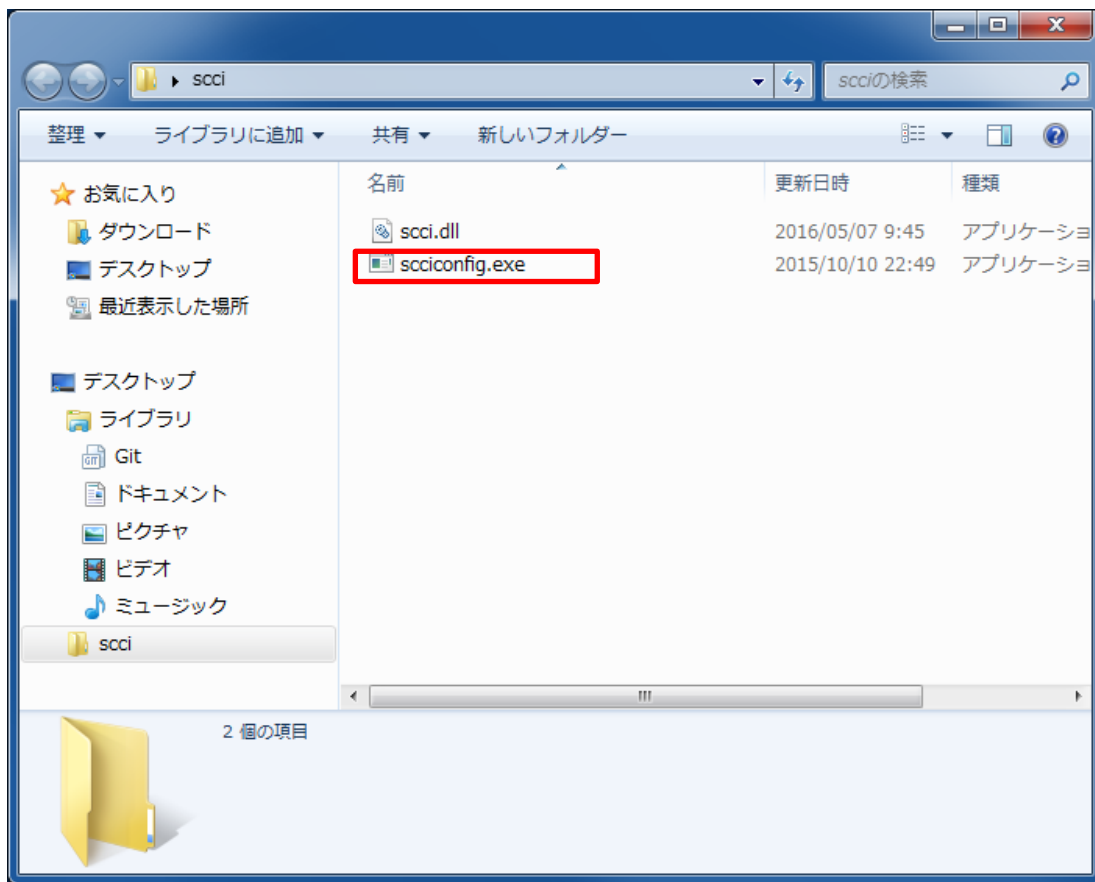
Project RE:Birthが開発している、音源用マザーボード及び音源モジュール

※ハードウェア毎に、設定できる項目が異なります。

scciconfig.exeの使い方(1／5)

scciconfig.exeを実行します。

※scciconfig.exeを実行するには、scci.dllと同じフォルダで実行する必要があります。

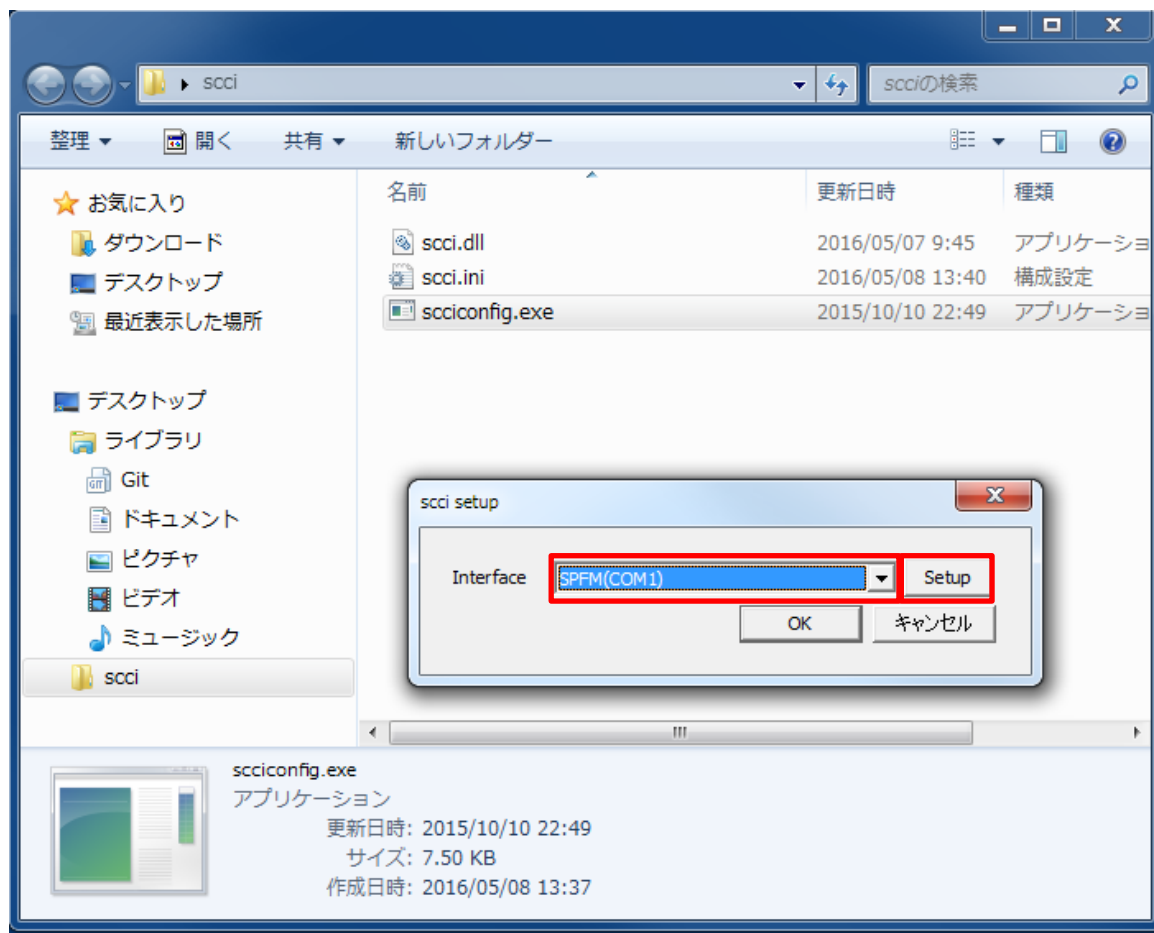


scciconfig.exeの使い方(2/5)

ハードウェア(インターフェース)を選択し、Setupボタンを押下すると設定画面が開きます。

※1:開かれる設定画面はインターフェース毎に異なります。

※2: scci.iniが存在しない場合、scciconfig.exe初回起動時に作成されます。

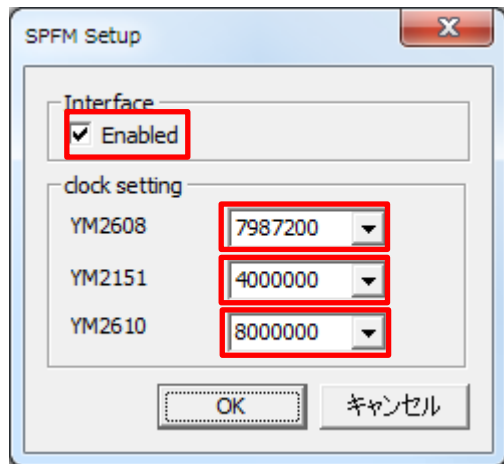


scciconfig.exeの使い方(3／5)

SPFM FMの塔の場合

以下の設定画面が表示されます。

設定が完了したら、OKボタンを設定を行わない場合はキャンセルボタンを押下します。



設定項目

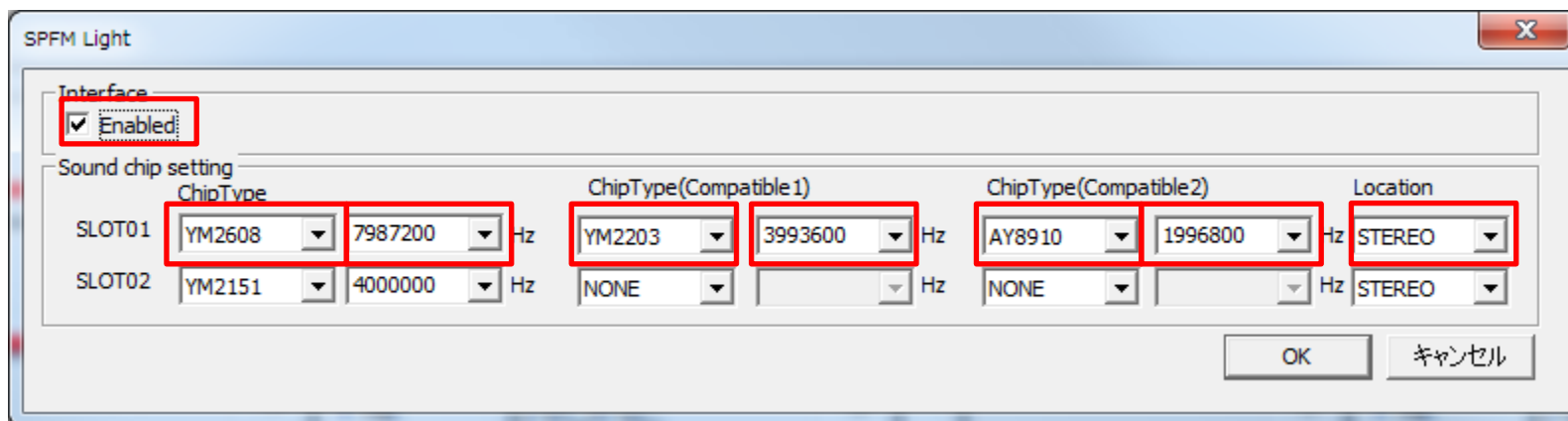
- Interface : インターフェースの有効／無効を設定します。チェックが外れている場合無効となり scci.dllより利用されません。
- clock setting: 各音源のクロック設定を行います。キットに付属のオシレータを利用している場合はデフォルトのまま使用し、変更している場合は、変更したクロックを設定します。

scciconfig.exeの使い方(4／5)

SPFM Lightの場合

以下の設定画面が表示されます。

設定が完了したら、OKボタンを設定を行わない場合はキャンセルボタンを押下します。



設定項目

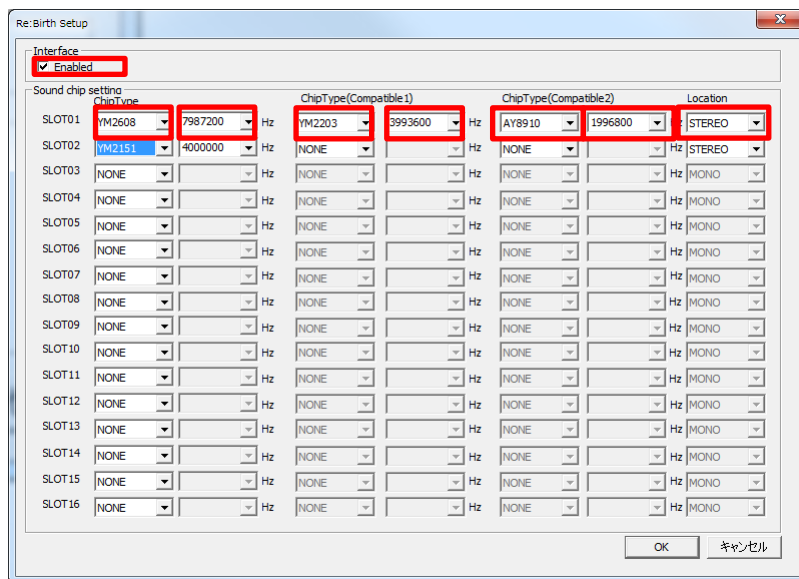
- Interface : インターフェースの有効／無効を設定します。チェックが外れている場合無効となり scci.dllより利用されません。
- ChipType : スロットに刺している音源モジュールのチップ及びクロックを設定します。
※ChipType(Compatible1/2)は、互換チップとして動作させる場合のチップ及びクロックを設定します。(良く互換と使われるものはデフォルト値として設定されます。)
- Location : チップの出力のステレオ／モノラルを設定します。

scciconfig.exeの使い方(5／5)

RE:Birthの場合

以下の設定画面が表示されされます。

設定が完了したら、OKボタンを設定を行わない場合はキャンセルボタンを押下します。



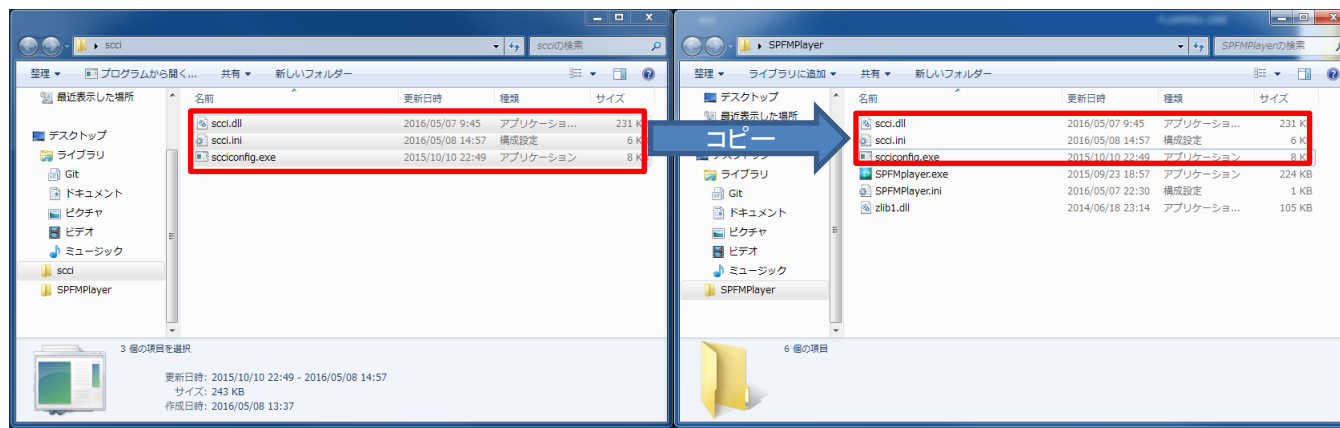
設定項目

- Interface : インターフェースの有効／無効を設定します。チェックが外れている場合無効となり scci.dllより利用されません。
- ChipType : スロットに刺している音源モジュールのチップ及びクロックを設定します。
※ChipType(Compatible1/2)は、互換チップとして動作させる場合のチップ及びクロックを設定します。(良く互換と使われるものはデフォルト値として設定されます。)
- Location : チップの出力のステレオ／モノラルを設定します。

SCCIの操作(1/5)

scci.dll及びscciconfig.exeで作成されたscci.iniを、対応アプリケーションのフォルダに格納し、アプリケーションを実行します。

設定の変更が頻繁な場合は、scciconfig.exeもコピーします。



動作確認

アプリケーションを起動後に、タスクトレイにアイコンが表示されていればSCCIは起動しています。アプリケーションで再生をして正常に音が鳴ればモジュールの設定は完了です。



注意

SCCIのアイコンが表示されていて、正常に音が再生されない場合は、音源の設定が間違っていないか、scciconfig.exeにて設定を再度確認してください。

SCCIの操作(2／5)

SCCIには、現在再生している音源の状態を表示するレベルメーター機能と、発音時間を遅延させるための遅延機能が、アプリケーション実行中に利用できます。

レベルメーター機能

各音源の各チャンネルの再生状況をレベルメーターとして表示します。

遅延機能

設定した時間、音の発音を遅延させる機能です。

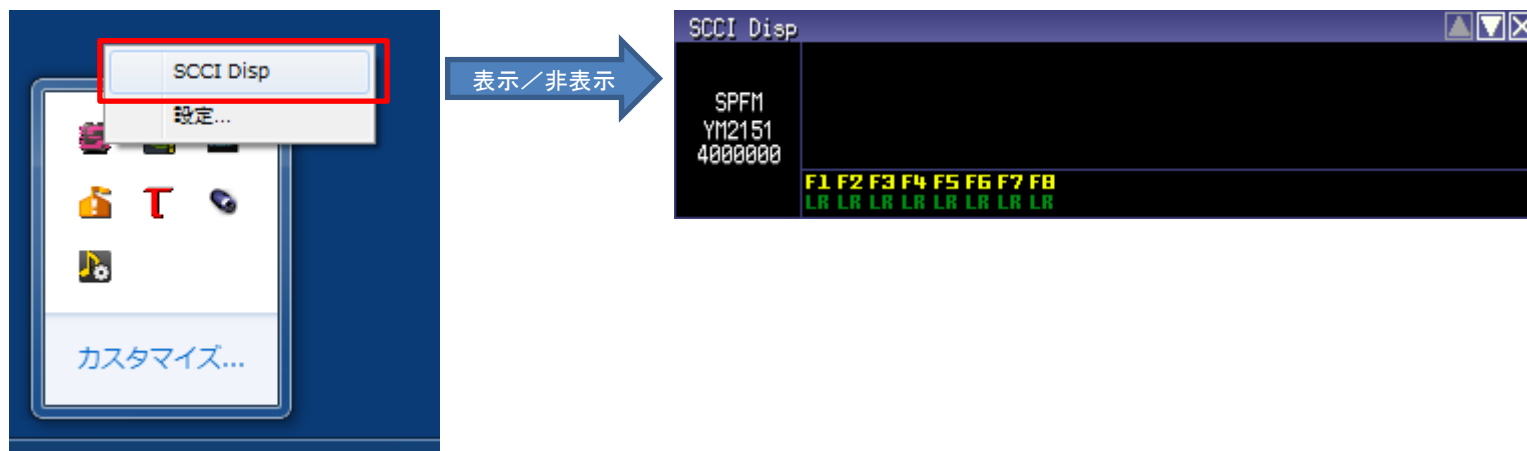
PCで行うPCMの再生などは、発音まで遅延が発生するため、音源モジュールの発音を遅延させて合わせる場合に利用する機能です。

SCCIの操作(3／5)

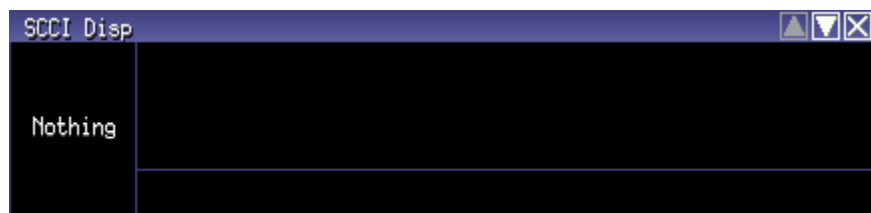
レベルメーター機能の使い方(1／2)

タスクトレイのアイコンを右クリックして表示されるメニューより「SCCI Disp」をクリックします。

レベルメーターが表示されていない場合は、レベルメーターが表示され
レベルメーターが表示されている場合は、レベルメーターが非表示になります。



レベルメーターの初期表示時は、アプリケーションで使用されている音源のみ表示されます。アプリケーションで音源が未使用の状態では、Nothingとして表示されます。



SCCIの操作(4/5)

レベルメーター機能の使い方(2/2)

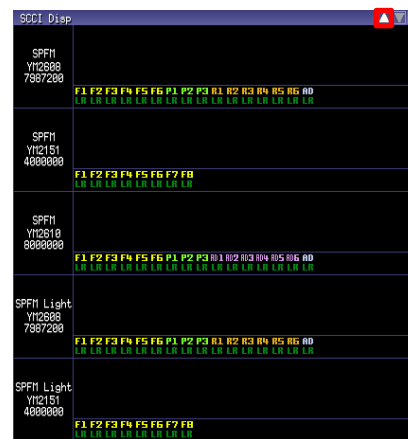
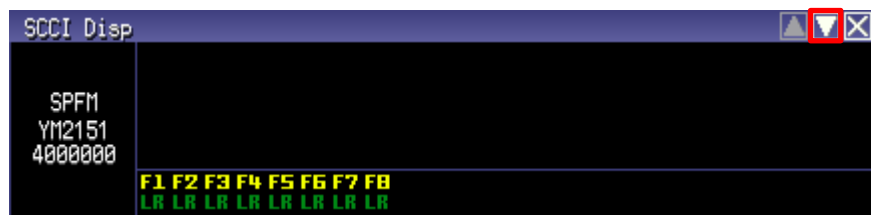
レベルメーター上からは以下の操作が可能です。

- ・SCCIの認識している全音源の表示
- ・レベルメーターの非表示

全音源の表示

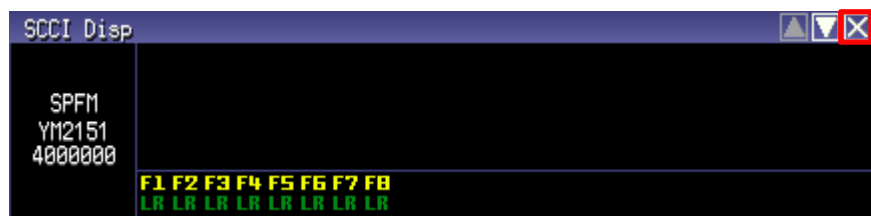
▽ボタンをクリックすることで、現在認識されている全音源が表示されます。

△ボタンをクリックすると、現在使用されている音源のみ表示されます。



レベルメーターの非表示

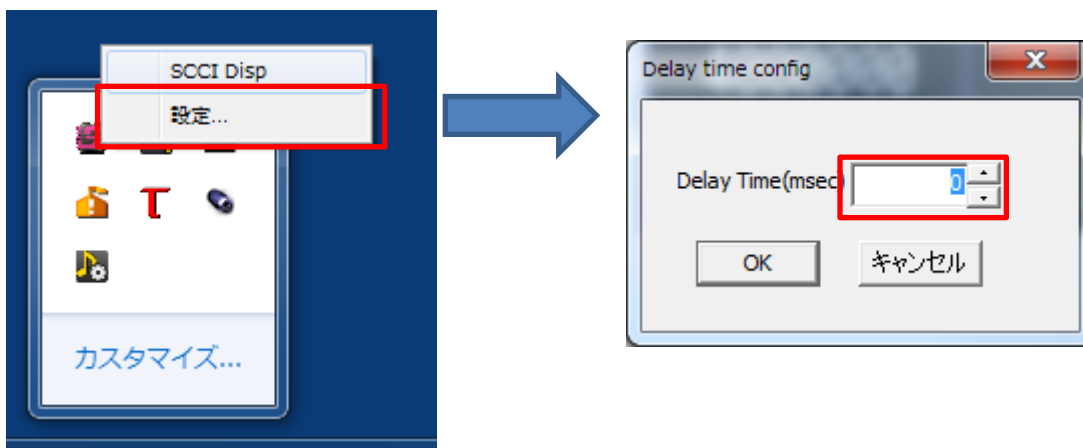
×ボタンをクリックすることで、レベルメーターを非表示にできます。



SCCIの操作(5／5)

遅延機能の使い方

タスクトレイのアイコンを右クリックして表示されるメニューより「設定」をクリックすると、遅延時間設定用のダイアログ画面が表示されます。



遅延時間を設定しOKボタンをクリックすると、遅延時間が反映されます。
遅延時間は、PCの環境やアプリケーションの実装により異なるため、ご自分の環境に合わせた、遅延時間を設定してください。
環境にもよりますが、100ms～500msの範囲で設定を変更してPCMと同期を取れているか確認しつつ設定することをお勧めします。